

## 近代における集落形成プロセスから見た山村集落の空間構成原理

五箇山地域相倉集落における水利システムと集落社会の関係性に着目して

THE SPATIAL COMPOSITION OF A MOUNTAIN SETTLEMENT  
THROUGH ITS FORMATIVE PROCESS IN MODERN TIMESFocusing on the relationship between a water system and  
a village community in Ainokura, Gokayama

森 朋子\*

Tomoko MORI

This paper aims to clarify the spatial composition of a mountain settlement through its formative process in modern times by the scope of the relationship between a water system and a village community in Ainokura, one of world heritage villages in Shirakawa-go and Gokayama. The following three points were clarified.

1. Three types in the relation between a water system and “*kumi*”, the smallest unit in a village community, are classified. Since they reflect on a classification as spatial units in a settlement, the space of a mountain settlement consists of them.
2. While each “*kumi*” has a dominant family, there is a spatial framework and role in a settlement.
3. The framework of a settlement determines the direction of its expansion and contraction.

*Keywords: Mountain Village, Water system, Village Community, Formative Process, Spatial Composition, Residential Areas*

山村集落, 水利システム, 集落社会, 形成過程, 空間構成, 居住域

## 1. はじめに

## 1-1 研究の背景と目的

富山県南砺市五箇山地域<sup>注1)</sup>は、1995年に世界文化遺産に登録された相倉・菅沼集落を有し、周辺一帯をその緩衝地帯とする、我が国有数の歴史的環境保全地域であり、中部山岳地帯の急傾斜と谷に囲まれ、日本に残された最後の秘境と称されたほど険しい山岳地帯にある日本有数の豪雪地帯でもある。また、五箇山地域の約6割の集落から縄文時代の土器や石器が出土しており、古来より人の住む環境にあったと考えられ、庄川沿いに発達した小さな河岸段丘や、

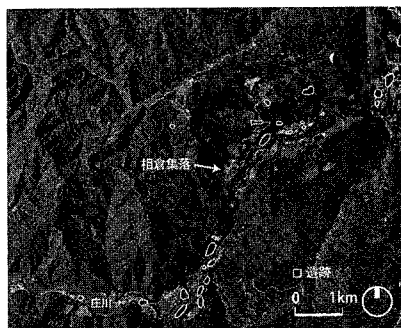


図1 五箇山の縄文遺跡と相倉集落<sup>注2)</sup>

山崩れ・地沁り等の緩傾斜面に集落が立地し、縄文式遺物の出土と現集落が重なることから、五箇山の歴史的過程を通ずる集落形成の根源は、自然的な基礎に由来しているとされている<sup>1)</sup>(図1)。

他方、浄土真宗という地域同一の信仰による精神的絆を基盤に、ユイ(結い)に代表される社会制度や生活慣習においても、特徴的な文化圏が形成されており、古くから民俗学調査が盛んに行われ、厳しい環境の下、集落が共同体として構築してきた社会(以下、集落社会)<sup>注3)</sup>生活の解明が進んだ<sup>2)</sup>。民謡などの無形文化財と共に、合掌造り家屋の重要文化財指定、1970年の相倉・菅沼集落の史跡指定と、有形文化財の保護がなされた地域であるが、意外にも、集落や地域空間の解明に関する研究は、十分に行われてはいない。

これまで五箇山地域における集落空間に関し、2つの既往研究がある。相倉集落を事例に、道と住居の関係や各住居間関係には規則性がみられないか、浄土真宗の道場坊<sup>注4)</sup>の家を社会・宗教生活の核として階層的な空間性がみられ、本家・分家の関係等の民俗事象から集落形態が明らかになる可能性があることを言及した研究<sup>3)</sup>と、集落内部の地域単位である「組」と一軒の有力家とが対応していることから、有力家が集落内における指導的地域を得るに並行して組の範囲が成立したと推定し、「組」に対し、有力家を核とする地縁的組織であることを推測した研究<sup>4)</sup>である。これらは、集落の形成原理に対し示唆に富む研究であるが、その方法は古老からの聞き取りや伝承に基づいており、確固とする根拠は提示されておらず、

\* 東京大学先端科学技術研究センター  
特任研究員・博士(工学)

Project Researcher, Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Dr. Eng.

その後続く研究の発展がみられない。また、大字に着目した地域空間に関する研究からは、集落内部の基礎社会単位である「組」が水利による地縁的關係により成立しており、大字単位の根源的な要因がこの水利と「組」によることが明らかにされている<sup>5)</sup>が、集落空間への考察はなされていない。よって本研究は、五箇山地域において、既往研究から明らかにされた大字単位根拠である水利と「組」に着目し、相倉集落を事例として、構築された水利システムと組の關係、近代以降の集落の発展や衰退から見える集落社会の分析から、集落の空間的な形成原理を明らかにすることを目的とする。

一方、我が国の集落空間に関する研究は、建築学をはじめ、民俗学<sup>6)</sup>や地理学<sup>7)</sup>など、多数の研究成果がある。また、集落での生活行為にある秩序は、「空間における作法(習俗-manner)の秩序であり、この構造が物的空間の形成に関与すると考えられ、農山漁村集落はこの点において非常に明解な法則性を有している<sup>8)</sup>」ことから、農村計画学では、1990年代を中心に集落の持つ法則性の解明に向けた研究が盛んに行われた。集落社会がもつ空間言語より集落社会が認識・理解している集落空間とその内在的秩序構造を考察した研究<sup>9)</sup>や、生活地名から集落域の空間意識の構成を明らかにした研究<sup>10)</sup>など住民の認識や意識に基づく土地利用からの集落空間把握に関する研究や、地形に着目した空間構成原理に関する研究<sup>11)</sup>、住居の構成原理、いわゆる集住の仕組みの解明<sup>12) 13)</sup>など、集落空間に対し様々な視点からの研究が行われてきた。一方、本研究と同位相の水利システムから集落空間を考察した研究<sup>14) 15)</sup>や、集落社会の考察から地域の圏構造を解明した研究は、五箇山でも古くから行われ<sup>16)</sup>、また水環境に関する基礎研究<sup>17)</sup>もあるが、集落の形成過程やその要因から空間構成を解明する研究<sup>18) 19)</sup>は、十分に進んでいるとはいえない。本研究は、水利システムと集落社会の關係性に着目し、近代の形成過程の分析から、集落の空間構成原理を明らかにしようとする点に特徴がある。なお、本研究は、村落領域論でいう「ムラ・ノラ・ヤマ」<sup>20)</sup>のムラ領域である居住域を扱い、これを集落という。

### 1-2 研究の方法

近代の集落形成過程からその空間構成原理を捉えるため、昭和45年(1970年)の史跡指定により保存されている五箇山地域の相倉集落を対象地とし、水利システムと、集落社会の中から既往研究で示唆された本家・分家や宗教など民俗的事象との關係性の考察を踏まえ、主に文献調査より、次の2つの視点から分析してゆく。

①水利システムと住居、組、民俗事象(浄土真宗)の關係(2章)

②近代の発展・衰退期における居住域の拡大・縮小プロセス(3章)

2章では、入手できた最古の図面である明治期の『相倉地引絵図(以下、絵図)』<sup>註5)</sup>を基礎に、水利システムと住居の關係を整理する。そこに昭和58年(1983年)の組<sup>21)</sup>を参照させ、水利システムと組の關係を考察する。さらに、浄土真宗の手次寺<sup>註6)</sup>別分析を補足的に加える。3章では、相倉集落の住戸数の推移を踏まえ、『平村史下巻』<sup>22)</sup>と資料<sup>註7)</sup>から、明治期、昭和初期に見られた拡大期の変遷、昭和後期、近年における縮小期の変遷を、本家と分家に着目して図面化し、集落社会と集落形成プロセスの法則性を考察する。以上を踏まえ、相倉集落の近代における形成原理を明らかにする。なお、2012年8月30日から9月30日まで現地に滞在し、現地調査や南砺市教育委員会・相倉集落住民へのヒアリング調査と南砺市立平岡図書館郷土資料室<sup>註8)</sup>で文献調査を行った。

## 2. 水利システムと住居、組、民俗事象の關係

### 2-1 相倉集落の成立

相倉は、標高380から420mの段状平坦地に位置しており、集落内に縄文式遺物の出土がなく、湧水が地表に出ていないこと、地表に突き出た岩などから、大きな地入りでできた平地に人が住みついて開かれた集落といわれている。天文21年(1552年)の五ヶ山衆連署申定では、「図書了敏(後に、『相倉村九郎三郎先祖』の書入れ有り)」、「あいのくら大郎次郎」の連署が見られ<sup>22)</sup>、すでに相倉の存在が確認されている。史跡指定も、この天文21年の古文書による集落の歴史的な古さが立証されたことが大きな要因となった<sup>註9)</sup>。

### 2-2 絵図に見る集落

絵図には、地番がついた土地割りと土地利用、谷川、道が記されている(図2)。集落内を縦断する城端への道(城端街道)は、東西の谷間に位置しており、集落内には、数十cmの石垣が多くみられ、東西の谷間の傾斜地を均し、屋敷地が形成されている(図3、写真1)。近世において、水田は皆無であり<sup>21)</sup>、取水以降の水路は明らかに屋敷地のために構築されている。また、城端街道を介し、城端、見座・中畑と上梨への3経路が合流する交通の拠点となっていた。

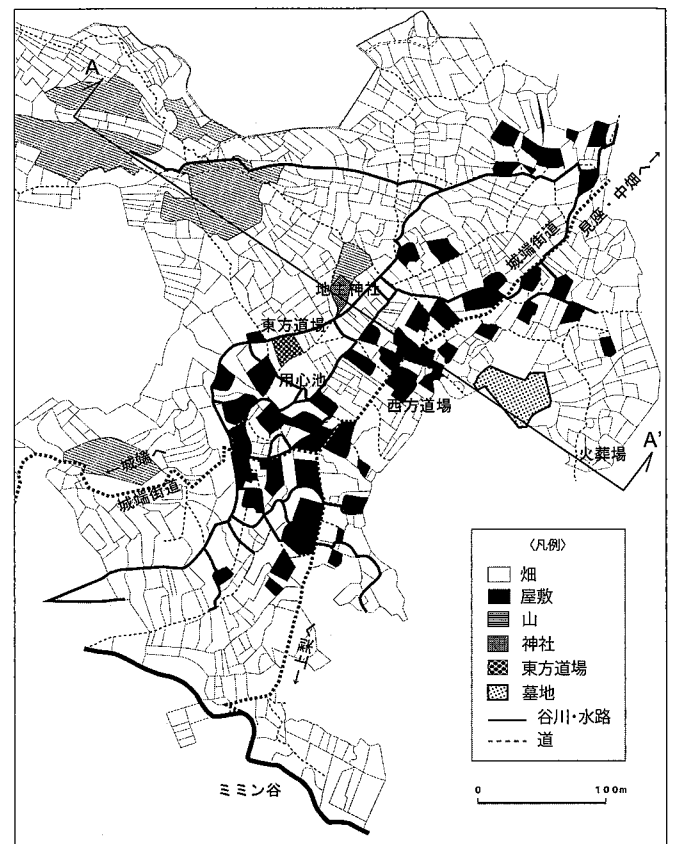


図2『相倉村地引絵図』(相倉区長保管)に筆者加筆<sup>註10)</sup>  
(明治8年(1875年)原図を昭和27年(1952年)に謄写:概ね上部が北)

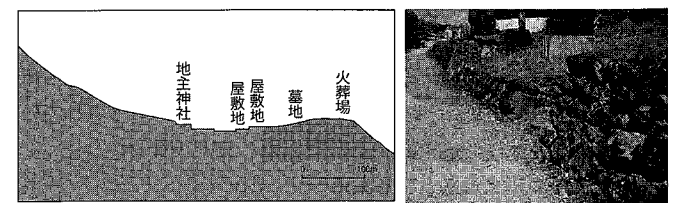


図3 A-A' 模式断面図 写真1 集落内の石垣(2012.9筆者撮影)

### 2-3 水利システムと住居・組の関係

絵図から、谷川・水路と屋敷地を抽出した(図4)。集落の水源は、集落位置より低いミミン谷と呼ばれる谷川からの取水は難しく、相倉に人が住みはじめたのは他集落より遅いとの言い伝え<sup>21)</sup>もあり、構築された水利は、相倉を人の住む集落として成立させる生命線ともいえる。西側の山際の湧水(図中A)から取水して水路を構築し、付近に屋敷地を集積している。集落の中央付近には、用心池と呼ばれる非常時対応の溜池が今も残っている<sup>21)</sup>。周囲には、集落の中心的な東方道場と、その道場坊の住居(図中12)があり、山側からの湧水もある<sup>21)</sup>。一方、城端街道の谷地をまたいだ集落東側は、小高い丘となっており、墓地として利用されている。地形的に水路が構築できないこのエリアにある住居は、城端街道を越えた西側の水溜池に、汲み水をしていた<sup>21)</sup>。水利と住居の関係には、利便性に大きな差が確認できる。次に、組分けが正確に判明した昭和58年時点の組<sup>22)</sup>と、その上位組織である班の境を図面化した(図5)。

班境は戦前と変わらず、特に上・中班境は「オボネ」と呼ばれる小高い地形で区切られ、組は班境を横断して組成されている。組は住戸数で変化するため、班境の位置を地理的に固定し、いずれかの班に組を加え、3班が編成されている。よって本稿では、班を集落空間の3区分領域と捉える。さらに、東方道場と西方道場を境に、「表」と「裏」と呼ばれる集落空間を二分する地名がある<sup>21)</sup>。

図4の水利に、昭和58年時点の組を重ねて模式化した(図6)。戸数の減少で組構成が変化しているが<sup>21)</sup>、組は、概ね同じ水利環境の地縁の組織として構成されている。また、その水利環境を比較すると、組は、水源近くに位置する「水上型」、その下に位置する「水下型」、水利システムから外れた「水汲み型」の3つの型に分類できる。これらは水利システムという空間的装置を介した集落の空間類型ともいえ、集落空間は、これら3つの空間類型の集積により構成されている。また、「表」と「裏」の分岐は、水利システムの分岐でもあり、集落社会は水利システムを基礎にして構成されている。

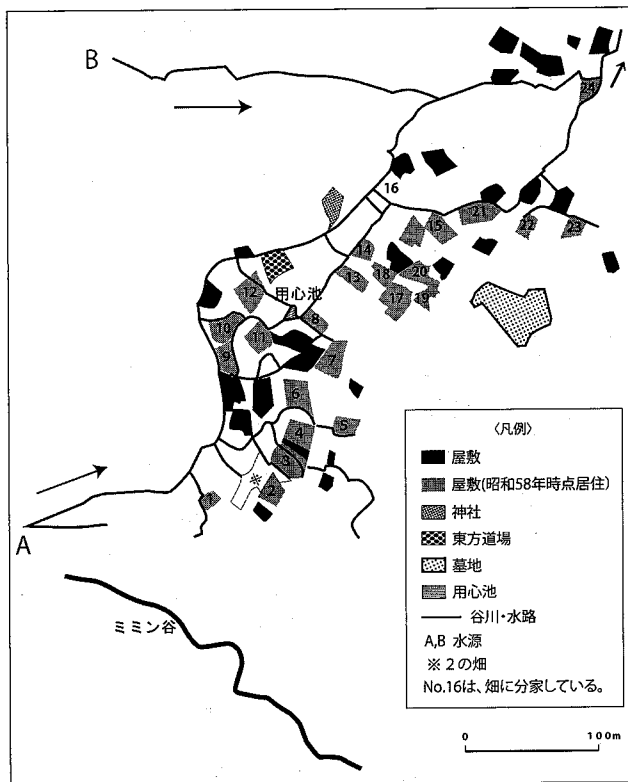


図4 絵図上の谷川・水路と屋敷地<sup>23)</sup>(概ね上部が北)

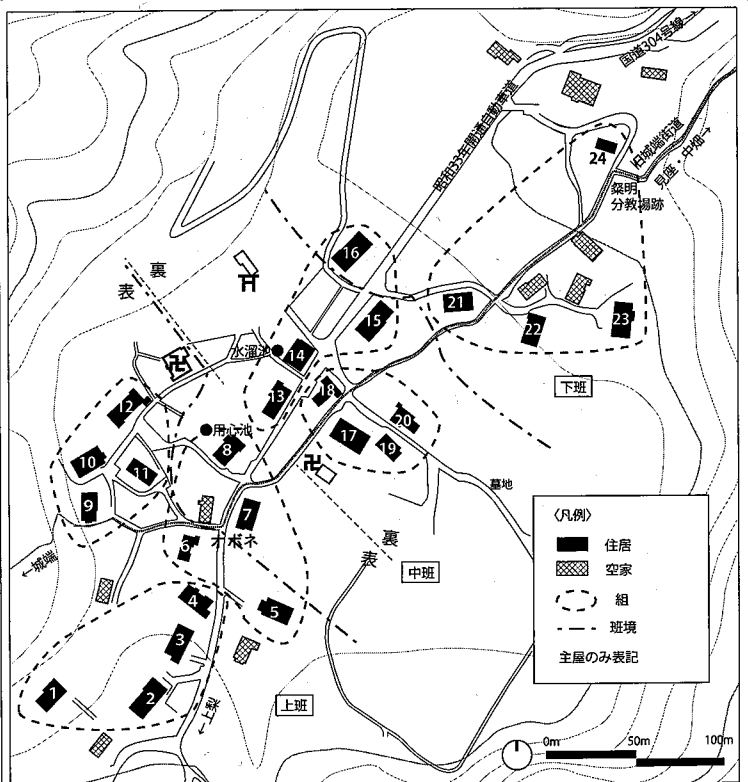


図5 昭和58年(1983年)の住居と組<sup>24)</sup>

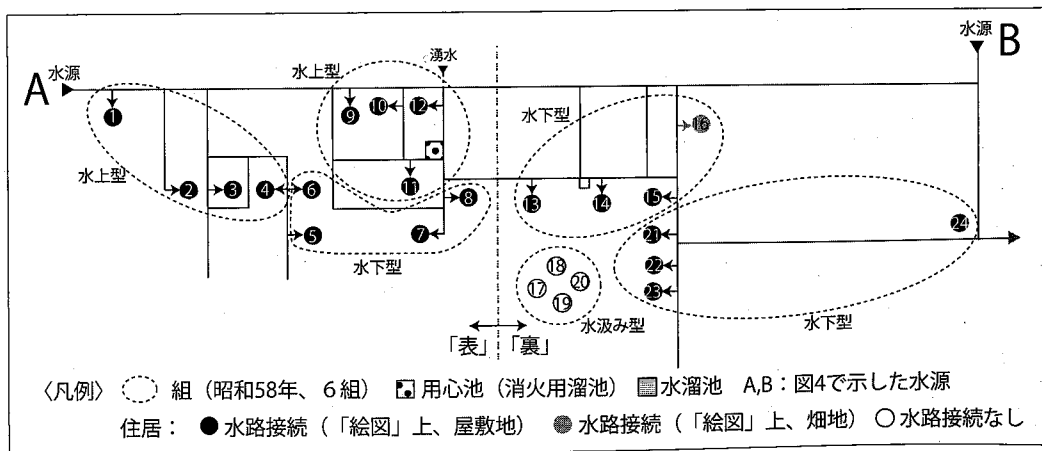


図6 水利システムと住居・組(昭和58年)の模式図<sup>25)</sup>

集落外へ移転した分家が目立ち、極相期に比べると、その数は2割未満に減少し、かつて拡大したエリアに空き家が目立つ(図14)。

図11で示した本家領域を、現在においても同様に示した(図14)。この領域は、各組に存在する有力家によって形成された集落の中心的な骨格を表すものであったが、縮小プロセスにおいても、本家領域を軸に収縮する方向性があることが確認できる。本家領域は集落の極相期以降の衰退期でも維持されていることから、集落は、各組の核となる有力家によって形成された本家領域を骨格とし、それを軸に縮小していることがわかる。

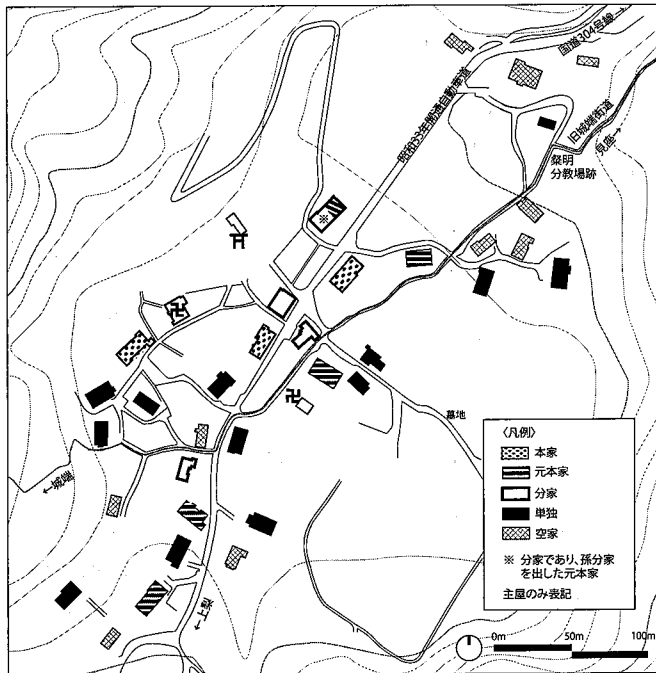


図13 昭和57年頃(1982年頃)(24戸)注22)

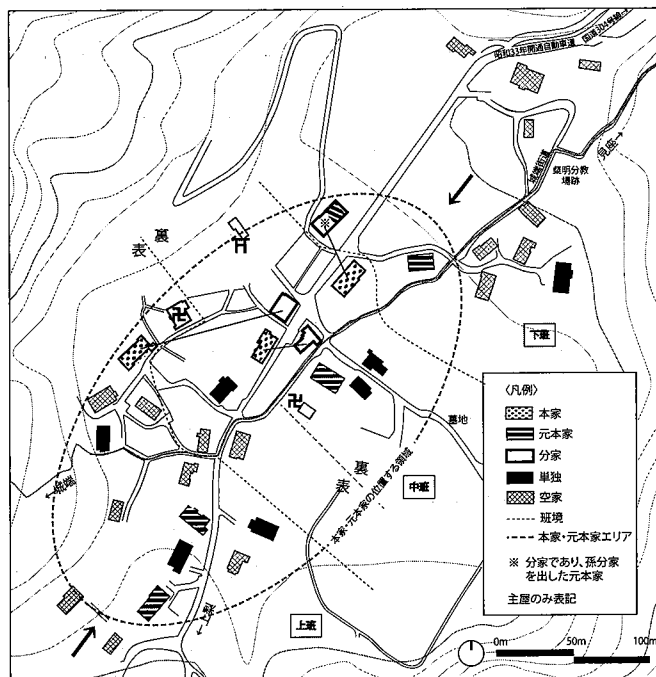


図14 現在(2012年)の居住状況(17戸)注26)

#### 4. まとめ

以上、五箇山地域において、水利システムと集落社会に着目し、近代以降の相倉を事例に、構築された水利システムと集落の発展や衰退から見える集落社会の分析から、集落形成の原理を考察した結果、次の3点が明らかとなった。

一つは、集落における水利システムと組の関係には、①水源近くに位置する「水上型」、②その水下に位置する「水下型」、③水利システムから外れた「水汲み型」の3つの類型が抽出され、相倉の集落空間はこれら3つの空間類型の集積として構成されている。

二つ目は、近代において分家を出した本家が、各組に分散して配置していることが確認され、本家は近世からの有力家であろうことから、集落は、有力家の台頭により組が組成され、拡大していったことが推測される。また、相倉の起源は、近世における要職者の配置や「表」領域と水利システムの関係などから、水源に近い西の山際エリアであることが推測され、水上型で構成された集落空間が、有力家の台頭とともに、次第に水下型や水汲み型を集積しながら拡大していったことが推測される。現在に至る集落社会の構成は、17世紀中頃以降であると考えられる。

三つに、集落は、各組に存在する核となる有力家の位置により、集落の空間的骨格を形成しており、集落は、この骨格を軸に、拡大・縮小している。

以上を要約すると、集落空間は、その単位根拠となる水利システムを基礎に、空間類型が有力家の台頭と共に形成され、集落空間はその集積として構成されており、また、各空間類型を形成する核となる有力家の位置が、集落全体の骨格を決定付け、集落はその骨格を軸に、拡大・縮小する特性を持っている。

本研究が明らかにした集落の形成原理の根底には、自然環境を読み社会システムをそこに反映させた、かつての封建社会が存在する。つまり、集落空間は、社会が変化した現在もなお、封建社会によって形成された空間原理に規定されているのである。現在の生活様式の変化と、この空間規定要因との齟齬を認識し、本研究で得た知見を歴史的環境保全の立場から集落計画や地域計画へ展開させていくことを、今後の課題とした。

#### 謝辞

本研究は、南砺市から筆者の所属した東京大学都市デザイン研究室に依頼された2012年10月策定の『南砺市五箇山世界遺産マスタープラン』にあたって調査した内容を含みます。五箇山の皆様と南砺市教育委員会をはじめとする関係各位に、心から謝意を表します。

#### 参考文献

- 1) 米沢康：五箇山研究ノート，飛騨文化研究会，1962
- 2) 小寺康吉：庄川峡の変貌，ミネルヴァ書房，1963
- 3) 菅原洋一：五箇山相倉集落の形態について，東海支部研究報告集，No. 14，pp. 13-16，1976. 1
- 4) 山田正浩：五ヶ山山村における屋敷配置と村落構造，愛知県立大学文学部論集一般教育編，No. 28，pp. 15-29，1978
- 5) 森朋子：大字単位から見た五箇山の文化的景観の深層構造 -世界遺産相倉・菅沼集落と周辺山村集落の文化的景観の保全に関する研究-，都市計画論文集，Vol. 48，No. 3，pp. 579-584，2013. 10
- 6) 市川秀之：広場と村落空間の民俗学，岩田書院，2001
- 7) 今里悟之：農山漁村の〈空間分類〉-景観の秩序を読む，京都大学学術出版会，2006

- 8) 社団法人日本建築学会編：図説集落，p. 11，都市文化社，1989
- 9) 寺門征男：言語空間（地名）からみた集落空間の組織化と構成原理について—農村集落の空間的秩序性に関する研究その1，日本建築学会計画系論文報告集，No. 416，pp. 55-65，1990. 10
- 10) 山崎寿一・重村力：生活地名からみた中久保集落の空間意識の構成 共同性の空間構成，日本建築学会計画系論文報告集，No. 451，pp. 167-176，1993. 9
- 11) 齊木崇人：集落空間の構成原理と地形立地，農村計画学会誌，Vol. 4，No. 4，pp. 19-32，1986. 3
- 12) 東京大学生産技術研究所・原研究室：住居集合論Ⅱ，鹿島出版会，2006
- 13) 黒野弘靖・菊地成朋：村落と屋敷の対応関係からみた散村の構成原理—砺波散居村における居住特性の分析 その2—，日本建築学会計画系論文集，No. 507，pp. 151-155，1998. 5
- 14) 丸茂悠・菊地成朋：水郷柳川における屋敷と水路の相互関係とその変容，日本建築学会計画系論文集，No. 564，pp. 113-118，2003. 2
- 15) 鈴木尚美子，畔柳昭雄：水網集落における水利形態と建築空間—滋賀県高島市の2集落を対象として—，日本建築学会計画系論文集，No. 611，pp. 7-14，2007. 1
- 16) 人文地理学会編：地域調査，柳原書店，1955
- 17) 豊島久乃：文化的景観における人と水環境の関係の研究，白川郷・五箇山の景観形成とその保存，独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所，2009
- 18) 牛島朗，菊地成朋：柳川市両開地区の集落形成プロセスと空間構成原理—有明海沿岸地域における干拓村落の展開 その1—，日本建築学会計画系論文集，Vol. 73，No. 632，pp. 2125-2130，2008. 10
- 19) 澁谷知子，大場修：丹後・沿海集落の空間構成とその形成に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系，No. 49，pp. 877-880，2009. 5
- 20) 福田アジオ：村落領域論，武蔵大学人文学会雑誌 神田秀夫教授記念号，Vo. 12，No. 2，pp. 217-247，1980. 12
- 21) 富山民俗の会：五箇山の村 相倉民俗誌，1987
- 22) 平村史編纂委員会：越中五箇山平村史 下巻，1983
- 23) 平村史編纂委員会：越中五箇山平村史 上巻，1985
- 24) 富山県教育委員会：富山県の民家 富山県民家緊急調査報告書，1980

## 注

- 注1) 本稿における「五箇山」は、世界文化遺産の緩衝地帯である南砺市の平地域（旧平村）・上平地域（旧上平村）を指す。
- 注2) なんとeマップ（2012年10月1日入手）「埋蔵文化財」を表示させた地図情報に、筆者が加筆して作成した。  
<https://ng2.city.nanto.toyama.jp/webgis16210pout/Facilities/IndexForm.aspx>
- 注3) 「集落社会」とは、大字を単位に集落住民が一つの共同体として構築した、その集落特有の社会をいう。
- 注4) 道場坊とは、道場の仏事を行い、一般的には世襲制である。近年では道場が寺号を受けて寺になっている道場が多いが、全く独立したわけではない。葬式などは本寺がつとめるが、報恩講は道場（寺）がつとめる。道場坊の役は全くの奉仕活動であるため、経済的に自立できる家がつとめており、当然村の運営や村政にも携わる中心的な家である。（参考文献23参照）
- 注5) 明治5年の大蔵省達第108号による土地所有制度確立のため、これまでの基盤割り制度（土地割換え制度）に代わり、永久的に所有者を確定するために、公的に作成された絵図である。スケールは入っておらず、方位は東西南北を文字で記載している。本研究では、12種類の字別にある絵図の中から、屋敷地として利用されている『宇中谷歩』を用いる。全ての土地割に地番がふられ、和紙に彩色して書かれた3〜4畳程度の大きな絵図である。富山地方法務局砺波支局や南砺市平行政センターでも、一部保管している絵図があることを確認した。不動産登記情報や地図情報がコンピューター化される現在でも、土地の所有権に関する一次資料として、五箇山の各集落の区長が保管する貴重な史料である。本研究で用いた絵図には、『新川縣管下第二十四大区三小区 越中國礪波郡相倉村地引繪圖』と記された横に、「登記所保管の原因と相違ない」として富山地方法務局平出張所長の捺印と、「明治8年12月（昭和27年1月騰簾）」とあった。よって、本研究は、昭和27年1月に複製されたものを参照した。
- 注6) 手次寺は、いわゆる本願寺の末寺のこと。相倉では、小松の本覚寺や福光（現、南砺市）の本敬寺、越前の万法寺など、広域に及んでいる。
- 注7) 南砺市立平岡図書館郷土資料室内高田文庫所蔵の手書き資料（注8参照）を参照した。
- 注8) 南砺市立平岡図書館郷土資料室には、参考文献22, 23編纂時に用いた一次

- 資料が保管されている。また、その編纂委員会の委員であった高田善太郎氏から、調査資料やメモ、新聞記事の切抜きや写真などの資料が寄贈されており、高田文庫として保管されている。本研究は、参考文献22, 23を主とするも、手書きの一次調査資料を適宜用い、より詳細な情報を参照した。
- 注9) 昭和41年7月25日付け富山県東砺波郡平村長から文化財保護委員会委員長に申請された「史跡指定申請について」に、天文21年の古文書で確認された記載があり、南砺市教育委員会が保管する当時の担当者の資料にも、事前調査において集落の古さが実証され、歴史的裏付けができた点を評価した記述がみられた。塩硝製造、和紙製造、養蚕等を糧としていたことなどが遺る生活様式もうかがわれる貴重な庶民の生活状態を今に遺しているものとして、文化財保護法第2条第1項で定義される史跡指定申請がなされ、昭和45年12月、『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準』における「交通・通信施設、治山・治水施設、水産施設その他経済・生産活動に関する遺跡」として、合掌造り建物を主体とする集落とその背後の茅葺や雪持ち林を含む約46haが史跡指定された。
- 注10) 相倉区長保管の絵図を筆者が撮影し、画像編集ソフトを用いて合成したものをトレースして作成し、加筆した。地番は省略した。
- 注11) 2012年9月29日、相倉集落区長図書館様へのヒアリングによる。
- 注12) 参考文献21には、「戦前の組」と「昭和58年4月の組」が図化されている。しかし、「戦前の組」の構成住居が不明確であるため、「昭和58年4月の組」を採用した。また、参考文献21(p.32)によると、明治以前の藩政時代の組分けの古文書はない。
- 注13) 図2から、谷川・水路・屋敷地・神社・東方道場・墓地を抽出し、昭和58年時点の居住地に、番号を記した。
- 注14) 参考文献21にある昭和58年の組と班を、参考文献22(p.177)にある昭和57年頃の相倉の図に参照し、図4と同じ住居に番号を記して作成した。「表」「裏」の境界については、参考文献3と注11を参照した。
- 注15) 図4より水利と住居の関係を模式化し、図5を参照して、組・「表」「裏」を加筆した。
- 注16) 南砺市立平岡図書館内高田文庫所蔵の手書き資料を参照した。参考文献22, 23には、門徒の数はあるが、手書き資料には家別の情報が記載されている。
- 注17) 参考文献23(pp.312-316)から、肝煎と組合頭(肝煎補佐役)を担った百姓名を参照した。
- 注18) 図9(明治20年頃)をベースに、注16・17を参照して作成した。また、班境と「表」「裏」境を付記した。手次寺とは、注6の通り、本願寺への末寺であるが、江戸時代の五箇山で寺院の格を持つ寺は、行徳寺と西勝寺のみであり、その他は道場であったため、寺院格を持つ手次寺が必要であった。現在では、上梨や中畑道場が寺に格上げしたことにより、手次寺が2つあるような構図になっている。凡例で、その関係を追記した。
- 注19) 平村教育委員会：国指定史跡保存管理計画策定報告書，1996 および、参考文献22(pp.175-178)を参照した。
- 注20) 明治4年の『五ヶ山両組村々草高免付百姓数目々帳』（利賀公民館所蔵）を、南砺市教育委員会の協力を得て参照したところ、相倉集落の百姓持高の最大持高8石3斗に対し、最小持高は4升2合でかなりの差があったことを確認した。
- 注21) 明治20年頃、昭和初年、昭和23年、昭和57年については、参考文献22(pp.175-178, p.201)を、昭和41年は「(史跡指定に対する)承諾書」の記名を、平成24年は、南砺市：世界遺産マスタープラン，2012.10を参照した。但し、昭和23年については、本・分家等の内訳が判明できず、住戸数のみを記した。また、分家が分家を出した家（一戸）も、分家を輩出した時点から本家として数えた。分家が他村へ転出し、分家を集落内に持たなくなった家を「元本家」とした。
- 注22) 参考文献22にある相倉の集落誌と、その一次資料となる手書きの調査資料（注8）を参照して作成した。また、本稿は集落形成プロセスに重きを置くものであり、現存以外の住居の位置・形状は、おおよそを示した。
- 注23) 水ノ江秀子，西山徳明：明治中期の土地利用にみる合掌造り集落の空間構成と伝統的景観—白川村荻町伝統的建造物群保存地区を事例に—，日本建築学会計画系論文集，No. 622，pp. 91-96，2007. 12 によると、景観の極相期（「クライマックス」）の把握は、将来の景観形成の指針や基準となる景観把握に對し重要であることが明らかにされている。
- 注24) 図10をベースとし、図9の分家化を追記して作成した。
- 注25) 図6をベースに、近代において分家を出した本家を記した。また、分家がさらに分家を出した家を、「孫分家あり」とした。
- 注26) 2012年9月の現地調査により、筆者が作成した。

# THE SPATIAL COMPOSITION OF A MOUNTAIN SETTLEMENT THROUGH ITS FORMATIVE PROCESS IN MODERN TIMES

Focusing on the relationship between a water system and  
a village community in Ainokura, Gokayama

*Tomoko MORI\**

\* Project Researcher, Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Dr. Eng.

This paper aims to clarify the spatial composition of a mountain settlement through its formative process in modern times by the scope of the relationship between a water system and a village community through a case study in Ainokura, one of world heritage villages in Shirakawa-go and Gokayama.

There are many researches about a village to find its spatial order among folklore studies, geography, rural planning studies and so on, and the pilot researches have been demonstrated by several approaches; however, we have not found enough about a formative process of settlements and the reason yet. Therefore this paper tries to clarify it.

This paper is mainly based on a literature review, a little support of local resident's interviews and a field survey from 30 Aug to 30 Sep, 2012, and consists of following four chapters, an introduction (Chapter 1), a body (chapter 2 and chapter 3) as a case study, and a conclusion (Chapter 4).

Chapter 1, as an introduction part, shows the research background, a brief review about pilot studies and methodology, and relates the aim to clarify the spatial composition of a mountain settlement through its formative process by a case study on Ainokura in Gokayama region, consisting of both of hillock sites and sandy gravel terraces in the SHO river valley where 60% of settlements have prehistoric sites(Fig.1).

In the chapter 2, starting with a brief historical review about Ainokura, this paper explains about spatial uniqueness of Ainokura (Fig. 2, Fig.3, Fig.4, Fig.5, Fig.6, Fig.7 and Photo.1). The main study analyzes the relationship between a water system and "kumi", the smallest unit in a village, by using the oldest map in 1875. This paper clarifies that Ainokura has three types of relationship between water and houses (Fig.6), and they reflect on "kumi" formation. This paper also classifies them as three spatial types in Ainokura.

In the chapter 3, the paper analyzes the formative process from around 1887 to 2012 with the shifting number of the families in Ainokura (Fig.8) focusing on the main family and its branch families (Fig.9, Fig.10, Fig.13, Fig.14). In the expanding period, there are many branch families by seven main families in Ainokura and they show a specific direction to expand (Fig.11). Referring to the three types in Fig.6 of chapter 2, this paper demonstrates that each "kumi" has a dominant family (Fig.12). In the contraction period, it also shows a specific direction to shrink (Fig.14).

The following three points were clarified as the conclusion in Chapter 4.

1. Three types in the relation between a water system and "kumi", the smallest unit in a village community, are classified. Since they reflect on a classification as spatial units in a settlement, the space of a mountain settlement consists of them.
2. While each "kumi" has a dominant family, there is a spatial framework and role in a settlement.
3. The framework of a settlement determines the direction of its expansion and contraction.

(2014年3月10日原稿受理, 2014年9月2日採用決定)